
吸血鬼の真祖と神（魔王）候補の転生者

クロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼の真祖と神（魔王）候補の転生者

【Nコード】

N1012Y

【作者名】

クロ

【あらすじ】

目が覚めたら出てきたのはいかにもな神様。え？神になれって？
・むしろ魔王？・・・そんなこんなでチートを引っ提げて魔法先生ネギま！の世界に武力介入！主人公（女）が欲望やら本能やらに忠実に好き勝手暴れまわるそんな物語。

『注意書き』

・本作品はチート転生モノです。主人公最凶です。戦闘で苦労とかしません。ご都合主義です。合言葉は「粉碎！玉砕！大喝采！」です。

- ・ ガールズラブ、ハーレム要素があります。
- ・ 原作主人公他に対するアンチ要素があります。
- ・ 原作ルートがブレイクされます

以上のような表現が嫌いな方は戻るを推奨します。

第一話 真っ白？神様？チート？テンプレです

「・・・・・・・・」

やあ皆さん。おはよう・こんにちは・こんばんは。ごきげんよう。

私はしがない小市民A（女）よ。

え？なんで名前を名乗らないって？

だって私、名前だけ記憶が無いのだもの。ついでに体もない。

気が付いたら辺り一面真っ白な空間。

自分はふわふわ浮いた光の玉みたいになっていて。

あ、ちなみに動ける。現在進行形で飛んでいる。

ふう・・・これはあれね。

私の好物である二次創作系の出だしね、わかります。

まあ、読むぶんには良いのよ？

だけどね、実際自分になってみると、やることはひとつ。

動きを止めて、すうっと大きく息を吸い込んで（肺どころか体無いんだけど）

「ううづう！私だれー」

「ふう……酷い目にあつたわい」

そう言いながらイスに腰掛ける白い髪に白いお髭、白い服の如何にもなお爺ちゃん。

「神にダメージ与える一般人なんぞ、そうはいないぞ」

実は全身にダメージを負っている。

この光る玉、物理的ダメージ与えられるのね。

具体的には、某超野菜人の何番目かが「チヨコになっちゃえ」でチヨコになり、チヨコにした相手をボコボコにした感じ。

さすがに喉は突き破ってないわよ？グロイし。

そんな訳で、部屋に入ってきた神様に開幕速攻でO☆H A☆N A☆SHIを発動させた私。

今は机を挟んで、対峙しています。

「それで、どういうことなのかしら？」

「ん？まあ、簡単に言うんじゃない・・・お主、神にならんか？」

「・・・・・・・・そういうお誘いは、美人な女神様とかの方が私的には嬉しいのだけど。具体的には主神に仕える三女神とか。」

「いやいや・・・別に最終戦争起こすわけでもないし起こってもおらんから。当代の天界の主・ゼウス様と魔界の主サタン様、親友じゃから」

ちよ、え？親友ってなにそれ。天国と地獄・・・じゃなくて魔界つてもっとも相容れない存在じゃないの？

「天界は理性を徳として、魔界は本能を徳とする。それだけじゃよ」

「・・・・・・・・ナチュラルに思考を読まないでちょうだい」

「それでも神での・・・というよりお主、思ったほど取り乱さないの」

「何を白々しい。記憶の欠落、体を改造？までしておいて。大方話をしやすいように、理解力やらも手を加えているのでは？」

「本当に恐ろしい奴じゃな」

「それで？神になるとは、どういうことなのかしら？」

「うむ、この世には天界と魔界が一つずつ存在する。それぞれを絶対神・ゼウス様と大魔王・サタン様が治められていて、その下にワシの様な神や、魔王が存在する。その更に下が天使や悪魔じゃな」

魔王が複数って・・・世の中の勇者様？泣いちゃうよ？

「そして神や魔王が管理する人間界が数限りなく存在する。そなたら人間の言葉でいえば、並行世界、パラレルワールド、外史などじゃな」

本当にあるのね、並行世界。これは神様に頭弄って冷静でいられるようにしてもらって正解ね。ご都合主義感謝。

「最近、その人間界の数が急速に増加し、神や魔王の手に余る事態が生じてきたのじゃ」

「それで私を神に？というか神ってそんなに簡単になれるものなの？」

「普通は無理じゃ。そもそも天使や悪魔は、人間が輪廻の間に魂を鍛えてなるんじゃない。これだけで軽く500年。まあ人生5回転生したらなれるかも？くらいじゃな。その後、より多くの時間を賭けて神や魔王にレベルアップ・・・というのが基本の流れじゃ」

その間にも新しい世界・新しい命・新しい魂が生まれるから、天使や悪魔が増えても普通の人間が減る事はない、と。それにしても、無から有を生み出しまくってない？真理に喧嘩売ってない？あの黒いによるよろ出てきちゃうよ？

「ところが極希に、突然変異していきなり神や魔王クラスの格を得る魂があるんじゃない。それがお主じゃ」

おおっと。眠りについた神や魔王の魂とかそんな流れすらぶった切ったよ私の魂。突然変異っておい。

「まあ、人手不足に加えて私がそれを手伝う資格があるのは分かったわ。それで具体的には何をさせたいの？」

「最初の数回は人間界の一つに行ってもらおう。そこで管理者として物語の終わりまでを見届けてもらう。慣れてきたら複数の世界を管理してもらうことになるじゃろ」

「物語？」

「世界、つまり人間界には何かしらの目的、物語がある。お主のよく知る二次創作のように、原作を物語にしていたり、お主の居た世界のように科学技術が発展しすぎて最終的には人類自滅・・・という物語もあるの」

おい！自滅って！ただの滅亡よりたち悪い！人類自重しろ！核？核なの？

「まあ実際には、静観し事態の推移、物語をただ眺めるもよし。一部の例外を除けば、積極的に介入して原作ブレイクをするもよしじゃよ」

「自由なのね」

「管理者のスタイルはそれぞれに委ねられておる。必要なのはどん

な形であれ物語を進める事。世界が増え続けると最終的に全部混ざり合って消えてなくなるからのう」

「・・・なんかとんでもないこと聞いた気がするけど流すわね。それより質問んだけど、天使や悪魔になる条件って？」

「生前に理性と本能、どちらを優先させたかじゃな。理性ならば善を積み天使に近くなり、本能ならば悪を積み悪魔に近くなる。そのまま何回も転生すると天使や悪魔になる。まあ、ここでの善悪は一義的ではない。悪といっても犯罪行為から色欲・強欲などまでピンキリじゃよ」

「・・・私の性格やら性癖的に魔王の方がいいんじゃないかしら？」

「それなら心配ない。今のお主は、魂の格は手に入れたが善悪どちらにも染まっておらん。数回管理を続けるうちにどちらかに染まるじやろ。その結果悪に染まるなら魔王として魔界で暮らすことになるろ。」

「あれ、いいの？　というか魔界ってどんなところよ？」

「わしらにしたら管理者が増えればそれだけ負担が減るのでな。神であろうと魔王であろうと関係は無いのじゃ。天界と魔界の関係も良好じゃしの。魔界も、犯罪を犯した者の転生先としては文字通り地獄じゃが、色欲程度ならむしろ願ったりかなったりじゃないかの？」

「・・・何だか、都合の良い想像をしてしまったのだけど」

「生前色欲の強かった者なら、その魂は大抵夢魔の下へ送られるの。」

そこで毎夜くんずほぐれつ・・・」

「さあ！きりきり話を進めましょうか！」

「お主、存外分かりやすいのう。まあ魔界の方には女の色欲系魂が多く行きそうだと言っておこうかの」

「ちょっと！確かに私は自称真性のレズビアンでドのつくサディストだけでも、とつかえひつかえなんかないわよ！」

「少しはオブラートに包むとかしないのかの？というか自称？」

「別に隠すほど恥ずかしい事じゃないもの。まあ変わっているとはよく言われるから認識はしてるけど。自称はまあ、本気でその道進む人には鼻で笑われるような・・・あくまで一般人基準での、という意味を込めてよ」

「まあそれはそれとして・・・女だらけの孤児院で育ち、女子高・女子大出身。先輩・後輩・同学年問わず多くの女生徒を跪かせ、視線を向けるだけで相手の頬を染めさせ可愛がる様についたあだ名が女帝。もっとも多感で排他的・危険な中学時代は、苛められる前に多くの女生徒どころか女教師までも味方に取り込み逆に付け込もうとした男子を言論で封殺。クラスを掌握後学年、学校全体まで手を広げる・・・まだ続けるかの？」

「ちょっと誤解を招く言い方じゃない？確かにちょっとハーレムっぽいことはしてたけど、本当の本気で関係を結んだ子はごく一部よ？全員等しく最大限に愛したしね」

「まあ確かにの。その辺で歪んでおれば、いくら格を持っているか

らと言って神になどせんよ。現にお主と関係を持っていた者も順調に幸せになっておるしの。お主と関係を持っていた者の中で、初めて男と結婚する者が出た時は内心かなり複雑だったようじゃがな」

「それはそれ、これはこれ、よ」

「ふむ、まあよい。なんだか色々話も逸れたし、途中受ける前提で進めてしまったがどうじゃ？この話、受けてくれるかの？」

そう言いまっすぐ視線を向ける目の前の一見お爺さんは、しかしその実素人の私でもわかるオーラを身に纏っている。

だからこそ、先ほどの色ボケ会話と思考を切り離し冷静に考える。

「最後に二つ質問。元の世界と私の関係がどうなるか。もう一つは何故名前の記憶を封じたか」

「元の世界のお主の存在は抹消される。元から居なかったことになる。お主と関係があった人間については、現状に一番合った状況に世界が勝手に修正する。男の恋人がいたり、一人身ならそういった関係が元から無かったことになり、同姓のパートナーがいるなら条件にマッチしたお主の代わりとなる存在と関係を持っていた、などじゃな。名前はその存在をもっともよく表す。お主が名前を覚えているとこの世界に留めるのが難しくなるのじゃ」

打てば響くように返ってくる答え。

正直この時点で現実世界への未練は殆どない。

孤児院育ちのため肉親その他が居ない。

お世話になった孤児院ともしばらく連絡を取っていない。

同じく学生時代関係を持っていた子たちとも卒業を共に疎遠になっている。

社会人半年で分かった風な口を聞くなと怒られるかもしれないが、この先数年、数十年、仕事を覚えてしまえば単調な、平凡な一市民としての生活が待っている。

さっきの色ボケ会話も大部分魅かれるものがあるが、それを抜きにしても好んで読んでいた二次創作ものの展開。

そういえば・・・

「こういった展開なら、神様からなにかしらの能力がもらえたりするのかしら？」

「もちろんじゃ。世界の管理者となるからには何であれ力を持たねばならぬからな。ついでに言うところよくある制限などもない。お主の望む能力を望むだけ与えよう。加えて不老不死はデフォルトじゃ。」

気前の良いことだと感心する。

そこで一旦心を落ち着けて、もう一度話を精査する。

そうして心を決めると、意識を神に向けはつきりと宣言する。

「その話、受けるわ」

「ふむ・・・まずはありがとう、と言っておこうかの」

「気にしないで。私にとっても刺激的な生活という意味で利のある話よ」

「それではさっそく与える力について話し合おうかの。まずは姿と名前じゃな」

姿と名前・・・不老不死、言うなればこれから永遠に等しき付き合いになる・・・慎重に選ばないと。

と言っても候補はすでにある・・・最初の姿がこの光球の時点で姿を変えるのは予想出来ていたし。

と思っていたら・・・

「まあある程度神として力を付ければ、姿を変えることも出来るんじゃないがな。それでも世界に入り物語を完結させるなら早くて数年、下手すれば数百年もありうるのではな」

あっさり変えられる宣言。さすが神。そう言えば・・・

「まだ、どんな世界に送られるか聞いてなかったわね」

「ん？ああ、そうじゃったな。最初に行ってもらうのは『魔法先生ネギま』……のような世界じゃ」

「……？のような世界？」

「ずいぶん曖昧な表現ね」

「うむ、いくつかの要因が混ざり合った結果、原作にある事が無かったり、逆に無い事があったりするようじゃな。お主、原作知識は持っとるか？」

「いいえ、アニメと二次創作関連で調べた知識だけね。原作自体は読んだこと無いわ」

「ふむ、能力として授けることも出来るが？」

「……いいえ、いらないわ。別段そこまで知りたいとは思わないし。知らないなら知らないで楽しめるしね」

「そうか……して、どうする？」

「決めたわ。小説『レイン』シリーズのシルヴィア・ローゼンバークの容姿にして頂戴。ただし、原作は15，6歳風の美少女だったから、私の年齢22歳相当の美女に、具体的には身長やスリーサイズを引き上げて頂戴。名前はそのままシルヴィアで。」

「お主……本当に欲望に忠実じゃな」

「当たり前じゃない、貰えるものは貰う主義だのも。本当は某四丁拳銃で天使狩りする魔女や、帝国の蒼き魔女、千年生きた大召喚士様なんかと迷ったのだけれどね。」

「まあ、お主の性癖には四者ともぴったりじゃがな」

迷った三人だと、全身ラバー・軍服・ほぼ下着姿が一番マッチするのが最大の障害ね。軍服はまだ違和感少ないけれど。普段着から苦労する。

それにこの三人だと可愛い服装が難しいという難点があるし。

何よりネギまの世界Ⅱ魔法使いならキャラ的にぴったりでしょ。

生き様も素敵で憧れるしね。

個人的意見から言えば是非レインとくつついて欲しいと思う。

「その年でまだ可愛いを・・・あだっ」

神様・・・年齢は関係ないのよ。

女の理想はいつでも可愛く美しく！

不適切な発言の神様にはチョコアタックをお見舞いよ。

「いたた、まったく・・・ほれ」

神様が手をかざすと、一瞬光で視界が塞がる。

視力が戻ると目の前には大きな鏡があり、そこにはバスローブに身を包んだ100人いれば100人が同姓・異性問わず美人と答えるだろう人が映っていた。

バスローブを脱ぎ、近づいてよく観察する。

豊かな銀髪はまっすぐに下され、腰まで届き艶やかに光る。

身長は女性にしては大きい方かな。おおよそ170cmくらい。

大きな瞳はサファイアブルー。ここは原作と違うが、大人びた風貌によくマッチしている。

顔の造形は原作通り、神が作った彫刻のように整っている。

全体的に見ても、原作のシルヴィアを成長させればこうなるだろうことは容易に想像できる完成度だ。

次に視点を下げて首や胸元、手や腕に向ける。

キメの細やかな、健康的な白い肌。

肌触りがシルクのような・・・というのはこういう肌を言うのだと実感。

ぺたぺたと肌を撫でながら、両手は大きく膨らむ女性の象徴へ。

「・・・んっ」

現実世界・・・もう神になる事を選択した私にとって前世よりも大きな胸を、自分の胸でありながら少々羨ましげに揉む。

感度の良さに危くスイッチが入ってしまいそうになるがここは自重。推定Eカップの胸は私的理想のと真ん中。

大きいんだけど大きすぎず、指が沈む。柔らかいのに張りがある。

女の身でありながら常々疑問に思っていた矛盾。正しく人体の神秘。

肌の細かさと相まって、触る分にもとても気持ちいい。

特に自分にこう言った女体特有の柔らかさを持たない男性が胸を重視するのも分かる気がする。

そのまま視線を下に向ける。

きゅっと引き締まったウエストにほどよく突き出したヒップ。

引き締まった太ももから続く長い脚線美は、高い腰の位置も相まって鏡の前で回り後ろから眺めても綺麗な一言。

全身のチェックを終えバスローブを着こむと、音に気づき、脱いだ辺りから後ろを向いていた神様が振り返る。

「どうじゃった？」

「最高の出来よ。さすが神様」

「それは重畳。それにしてもお主、羞恥心は無いのか？」

「神様ならその手の欲は少ないのでしょ？それにこれだけ綺麗だど気にならない・・・というか見せびらかしたいという思いが出てくるわね。ナルシストの人ってこういう気分なのかしら」

「一応男の目にさらしても気にならんのか？」

「あれ、言ってなかったっけ？私は確かにレズビアンだけれども、別に男嫌いってわけじゃないもの。興味がわかないだけで。だから別に見られても気にしないわ。まあ、この先も男を好きになる事はないでしょうけど。だから自称・真性なのよ。」

「なるほどの。まあ、満足してもらえたならよいが。次はどうするかのか」

肉体を得た私は神様に向かうようにイスに腰掛け、目の前に現れた紅茶を飲んで思考を回転させる。

「そうね・・・まずは手堅くステータスMAXで行きましょう。肉体的・精神的全能力を上げて頂戴」

「本当に容赦ないの・・・」

「私の好きな言葉・・・粉碎！玉砕！大喝采！だから」

「・・・もう何も言わん・・・ほれ」

神様がまた手をかざし体が光る。しかし今度は目に見えて変化が無い。

しかし立ち上がり体を動かすと変化は一目瞭然。

軽く走ってみたり、飛んでみる。手近なものでイスを掴み振り回してみる。まるで小枝のように振り回す事が出来る。

頭の回転も早くなった気がする。体を動かすのと同時に状況判断なども多角的に行える。

「すごいわね・・・具体的なスペックはどうかしら？」

「そうさの・・・肉体的にはあらゆる世界で最強種に認定されている龍族の中でも、更に強い古龍種を片手で屠れるのう。神候補の不老不死に加えて超再生、首を落とされても心臓を貫かれても次の瞬間には再生するぞ。まあ、そもそも体を上手く使えるようになれば、硬化で攻撃が通らなくなるがな。精神的、頭脳的に言えば、MITの首席が赤ん坊に思えるくらいの能力かの」

「・・・へえ、さすが神様」

龍族を片手って・・・それにMIT、マサチューセッツ工科大学の首席って言ったら、おおよそ世界でもっとも頭が良い人ってことにならない？ 厳密には違う場合もあるのかもしれないけれど、それでも世界で十指には入るわよね・・・。IQ換算？ 250くらいだって

まあ、貰えるものは貰う。うん、次ね。

ネギまの世界なら、気と魔力ね。

「気と魔力の総量、それを完全に扱う事の出来る才能、あらゆる技

術を短期間で効率よく習得できる才能を頂戴。後は前世の世界の一般知識を一通り。」

「ふむ・・・ほれ。総量はエネルギー換算で地球五つ分。才能と一般知識だけでいいのか？このままじゃと、技術が無いから、下地がすごいだけの一般人じゃぞ？」

「序盤はチート能力ごり押しで生き残り、その間に自分で身につけるわ。こればかりは自分で学ばないと本当の意味で使いこなせないし。何より一から学ぶのも楽しそうだしね。」

「ほう・・・他にはないのか」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの不老不死を何とかする方法」

「・・・残念ながらそれは無理じゃ」

制限無しと言っておきながら無理・・・という事は

「それが一部の例外ということかしら」

「そうじゃ、原作がある世界では、開始時点に登場人物が絶対に揃わない状況に陥ると世界が崩壊する」

「それじゃあ、たまにあるアリカを寝とって薬味が生まれない状況を作ると？」

「またコアな設定じゃな、しかも女の身で寝とるって・・・まあ崩壊するな」

重要なのは、登場人物が揃う事。それなら状態は関係ない？

「彼女の不老を一時的にでも抑える方法は？」

「それならあるが・・・」

「じゃあそれを頂戴。女にとって、いつまでも成長しないってのはきついもの。お洒落も出来ないし」

「よかろう。方法は向こうに行ってすぐ、魔法を学んだときに入手できるよう手配する。」

「それじゃあ、最後に一つ」

言葉を区切ると一旦目を閉じ深呼吸。

最後の迷いを捨てると、正面の神様を見つめはっきり告げる。

「殺しの覚悟を得る手段」

「ほう・・・」

「神様ならちよっとの時間が百年位になる部屋とかあるでしょ？猫の姿した神様の部屋の的な。貸して頂戴」

「あるにはあるが・・・急じゃのう」

「どうせこれから色々な世界に行くのなら遅かれ早かれ殺しは経験するでしょう。さっきので分かっていると思うけど、私は1400

年ごろの地点から介入するから」

ハイ・デイトウオーカー
「吸血鬼の真祖と共に、か」

「ええ、だから殺しも出来るようになっておく必要があるの。技術はともかく・・・心が折れないように」

「・・・よろう。その扉から進むといい」

そうして神様が手をかざすとどこからともなく扉が現れる。

そして私の服装も、全身をびったりと包むウェットスーツの様な格好に。

手には両刃の長剣。

「ありがとう神様。とりあえず百年位籠ってみるわ」

「ああ・・・」

言葉少なな神様を安心させるように微笑むと、扉を開ける。

そうして私は新たな、刺激的な生活に繋がる一步を踏み出した。

第二話 神様特製装備一式!やりすぎ?なにそれおいしいの? (前書き)

前回のあらすじ

神様と会話

並行世界の管理者となることに
チートをたくさんもらう

第二話 神様特製装備一式！やりすぎ？なにそれおいしいの？

皆さまごきげんよう。

小市民A改めシルヴィアよ。

神様に拉致され、なんやかんやで神（魔王）候補になってチートバグキヤラになったどこにでもいる女よ。

今は神様特製、精神〇時の部屋で百年耐久殺し殺されまショーを終えて出てきたところ。

最初の部屋に戻ると神様はいなくて、机の上には紅茶。

私的には日本茶の方が好きなのだけれどこれからの事を考えると紅茶も飲めなきゃいけなししね。神様製らしく飲みやすくておいしいし。

とりあえずイスに腰掛け、一息つく。

神様は案外鬼畜だった。

魔界に送られるような犯罪者の魂を呼び寄せて人の形に戻した。

私はそれを・・・斬った。

体感時間でおよそ百年、それでも決して忘れず、殺しに慣れることは無かった自分の人間性にすこし安心。

それでももう、殺すことに躊躇はしない。後悔もしない。

私は私のために殺した存在を受け入れ、背負い、歩んでいく。

その覚悟を持つことが出来た。

部屋に籠った最初のころは酷かった。

当然と言えば当然、神候補になろうと、元はただの人間。

特に人を斬ると言う非日常の行動。それを成すには強い動機が必要だ。

それが無いまま、深く考えないまま必要だからと部屋に入ってしまった。

一人殺し、うろたえて嘔吐している間に他の魂に殺される。

痛みに苦しみ、逃れるために反撃。

そんな狂乱の中、散り散りになった思考で考えていた。

刺激的な生活を欲して話を受けた。ではその生活の中で私はなにがしたいのか？

殺し殺され、出した答え。

それはとても人間的だと思えるもの。傲慢・・・とも言えるかしら。

『私は、私と私の大切な者のために生きる。そのために力を行使する』

当然と言えば当然の、結局はそんなものだった。

神であれ魔王であれ、管理者として世界を渡り、物語に介入し見届ける。

そんな私の行動指針は私の好きなように生きると言う事。

気にいった者と楽しく過ごし、邪魔する者は叩き潰す。

手の届く範囲の大切な者を守り、それに仇成す者を捻り潰す。

気にいらぬ者は放置する。協力も助けもしない。生きようが死のうが私には関係ない。

私は正義の味方ではないし、無関係な人のために行動なんかしない。力のある者は多くの物を助けなければならない？そんなのはごめんよ。

その存在を気に入るかどうかは私基準。

人であれ、物であれ、あるいは概念的な存在、組織や社会・国などもあるかもしれない。

何であれ、気にいったのなら最大限力を使い助け守り協力し、気にいらなければあっさり斬り捨てる。

私は私と、私が大切だと思う者のためにのみ力を使う。

力を持つ者の傲慢・・・排他的・・・いくらでも出てきそうね。

それでも構わない。それが私の生き方。私の覚悟。

やっぱり魔王寄りかなと苦笑しながら後ろの存在に声をかける。

「そんな感じで行こうかと思うのだけれど、どうかしら？」

「そんな感じで行こうかと思うのだけれど、どうかしら？」

「ふむ、まあよいのではないか？」

久しぶりに会った神様が目の前に座る。

「一応気配を断っておったのじゃが、良く気付いたの」

「それはもう。百年も鍛えればね」

そう、鍛えたのだ。

実際殺しの覚悟を固めて、体に染み込ませるのは最初の10年くらいで済んだと思う。

それじゃあ後の90年何をしていたかというと、一言でいえば鍛錬。

二言でいえばチート鍛錬。

部屋の特性で体力は減らない・眠くならない・お腹も減らない。

そんな中で次々出てくる相手に戦い続けた。

最初は呼んだ魂の、つまりは普通の人が相手だった。

それがいつしか魔物になり、さらには天使や魔族になっていた。

ちなみに魔物は、知性の低いモンスターを指す。

簡単に言えばゴブ○ンやス○イムだ。

その上位者が魔族。高い知性を持つ存在。原作だとヘルマンとか言ったのがこれに当たる。

この二つを合わせて悪魔という。その上が魔王。

部屋の作った仮初の存在なので、自我や命といった意味では存在していない。

それでも魔族、それも夢魔の綺麗なお姉さんが出てきたときは神様を少し恨みつつ泣く泣く斬り伏せた。

そんなこんなで百年も戦えば、自然と技術も鍛えられる。

具体的には体の使い方や気の扱いなどだ。

お蔭で気を全身に巡らせて強化したり、気弾を放つことも出来るようになった。

我流で剣術もそれなりに。途中から日本刀に変え、文字通り『斬る』ことを重視した。

西洋の剣は力に任せて叩き斬る、が基本だったから。

「そうだ、忘れる前に言っとかなきゃ。一つ追加で欲しい能力が出来たの」

「何じゃ、まだあったのか？」

「魔眼が欲しいのよ。能力は分析・解析特化型」

「何じゃ。直死の魔眼やら絶対遵守の王の力でも望むかと思うたのに」

「その辺は自分の手で直接するからこそ楽しいのよ？」

につこり微笑んだというのに、神様は視線をそらした。あ、一応言っとくと従わせるって意味でよ？殺して喜ぶ変態さんにはなっていないから。可愛い子を跪かせるなら自らの力でじわりじわりと墮としていくのが・・・ね。

「ワシはなにも言わんぞ、ほれ」

「神様の対応が冷たいわね・・・ん、ありがと」

神様が手をかざすと一瞬目のあたりが熱くなる。恐らく変化したのだろう。

「魔力を集中させれば発動じゃ。発動中は眼の色が深紅に染まるぞ」

「わかったわ。・・・さて、そろそろ行こうかしら」

「そうか・・・持ち物や装備はどうする？」

神様の言葉にふと考える。

今は部屋に入るときと同じくウェットスーツに無銘の日本刀

「うーん、神様に任せるわ。どんなものが来るか楽しめるし。向こうで目覚めたら持っている状態にしてちょうだい」

「なんでもいいが一番困るんじゃないの。まあいいわ、任せておけ。ほれ」

神様が手をかざすと机の横に大きな光球が現れる。

「それがお主の行く世界じゃ。触れれば入る事が出来る。時代は1400年ごろ、原作登場人物の一人、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルの住んでいた城の近く、状況は彼女が吸血鬼ハイ・デイルイトウォーカーの真祖にされてから一週間というところじゃな」

神様の説明を聞き納得すると立ち上がる。

「それじゃあ、行ってくるわ」

「ああ、達者での」

短い会話を終わらせると、最後に神様に頷き、光球に触れる。

視界が光で満たされる。

さあ、それじゃあ私の新たな物語をはじめましょうか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

目を覚ますと目の前には綺麗な小川が流れ、向こう側と自分の後ろには森が広がる。

そんな森の脇の草っぱらの上で目を覚ました。

気を巡らし周囲を確認。

付近に獣や人の気配はしない・・・とりあえず安心ね。

それじゃあさっそく装備の確認をしようかと立ち上がり、視線を自分に向ける。

まず履いているのは膝下ぐらいのロングブーツ。

きつ過ぎず緩すぎず、しっかりとした作りのオーダーメイドかと思えるぐらいのぴったりサイズ。

ヒールは無いぺたんとしたタイプ。まあ、これからしばらくは歩きが基本なのだからこれでいい。

上にブラウス、下にショートパンツは原作通り。違うのはベルトをしていたこと。

ただショートパンツが思ったより短くて、お尻が少し出るかどうかのホットパンツレベルなのはどうか。

まあ、分類上どちらもショートパンツなんだとか細かい話は置いて。

それに実際の所、きわどい短さのホットパンツから延びる引き締まった脚は我ながらカッコいいと思う。

・・・やっぱりナルシストの気が、ゲフンゲフン

次に地面に置いてあるローブ。

まあローブといっても、袖あり、前開き、フード付き、腰丈の・・・むしろパーカー？と思わないでもない。

でもローブ。ローブと言ったらローブ。なぜなら魔法使いの正装はローブと決まってるから（ドーン）

最後にマント。これは膝下くらいまで覆う、完全に外套としてのマント。フード付き袖なし胸元でボタン止め。

そんなこんなで見た目の確認は終了。ちなみにローブ以外はみんな黒。

ローブは黒地に赤と金で飾りつけられている。

ローブも着こむと全体的に品の良い感じでかなり好印象。神様グッジョブ。

・・・ただしちらりと覗いた下着は上下とも高級店にありそうなセクシーな赤だった。私の好み丸わかりですね、わかります。

マントはとりあえず脇に置いておく。

一通り眺めると、今度は意識を体に向けて集中。

お臍の下あたりにある、気の集積地・丹田。

ほぼ同じ位置にあるのを感じる魔力に意識を集中。気と同じ要領で魔力の通り道を通し全身に魔力を行きわたらせる。

最初の数分はまったく動かなかったが、次第に微量ながら流れだす。

今はこれでいいと、そのまま目にだけ集中する。

魔眼の発動を感じる。そのまま視界を動かすと、意識したものについて情報がどんどん表れる。

優秀なのは何でもかんでも情報が表れ氾濫する訳ではないと言う事。

あくまで意識したもの、あるいは意識の上で特定したものに限られるようだ。

そんな訳でもう一度身に付けているものを眺めてみる。

まずはブーツ。

オートリペア オートクリーン オートリジエネ
自動修復・自動清潔・自動体力回復・自動加速の魔法が付与。

・・・壊れず常に清潔、どんどん回復いくらでも歩けます（加速付き）ってことよね。

ホットパンツにブラウス、下着も見てみる。

オートリペア オートクリーン
自動修復・自動清潔の魔法付与

・・・手荒に扱っても破れない、おまけに洗濯いらずで常に清潔なことね。

ローブも見てみる。

オートプロテスオートシエル 自動物理防御・自動魔法防御・自動体力回復・自動魔力回復・自動修復・自動清潔・自動環境快適魔法付与。
オートクリンオートフライン

・・・まあいいか。便利だし。
・・・これ一着で鉄壁防御！どんな環境でも生きていきます！快適性も保障！

最後にマント。

オートプロテスオートシエル 自動物理防御・自動魔法防御・自動体力回復・自動魔力回復・自動修復・自動清潔・自動環境快適魔法・自動収納魔法付与
オートクリンオートフライン オートリジエネオートリフレッシュ オートホールド

これ、ローブと一緒にじゃない？と思ったのだけれど全然違う。

外側＝マントの防壁を越えた先にはローブの防壁が展開・・・という事よね。

オートホールド 自動収納魔法は、マントの内側に押し当てると勝手に収納されるようだ。マントの裏地がゲートになっている。倉庫みたい。

そんな訳でちよっとやりすぎた？いやいや便利は偉いと内心ホクホクしながら次に視線を向ける。

次は草っぱらに寝転んでいた私の右におかれていた武器二つ。

一つは杖。

全長は150cmくらい。立った私の目線の高さに先端が届くくらいだ。

片手で握れるくらいの太さで先端から20cmくらいが少し太くなり六角形になっている。

その六角形が台座となり、その上に六つの爪で固定された拳サイズの水晶が付いている。

台座部分には二匹の蛇が逆方向に絡まり、螺旋を描いて上って行き、台座の両横に頭を付ける意匠が施してある。

・・・この後の展開がなんとなく読めそうだと思いつつ魔眼で解析。

名称『ヘルメスの杖』能力…自動魔力回復付与・魔力伝達効率強化・
オートリフレッシュ魔力集束効率強化・魔力拡散効率強化・状態不変

うん・・・あれだね。ケリュケイオンとか呼ばれることもある、ギリシア神話の伝令の神、ヘルメスが持つ杖ですね。わかります。

というか、ゼウスがいるならヘルメスもいるんじゃないの？怒られないの？とか心配になる。

それにこの杖、二匹の蛇が絡まり上る様が、光と闇・善と悪・天と地・太陽と月・男と女・陰と陽なんかの二面性を表すとかじゃないか
ったっけ？

女の身で女を愛する私としては持ち主として杖に喧嘩売ってない？
いや、二面性の統合という意味ではむしろ合ってるのかしら？

・・・・これ以上はやめておきましょう。能力的に便利で強そうなのは事実だし。

それにしてもスタートから伝説級武器装備か。さすが神様。さすが私。

更に解析すると、魔力を流して念じると30cmサイズの短杖に変化することも出来るようで、変化させて右の腰のベルトに差す。

もう一つの武器は、特徴的な反りをもつ短刀。

刀身も30cmほどで鰐がない。ナイフ代わりに使えそう・・・
・そんなことを考えていた時期が私にもありました。

名称『妖刀正宗』能力…自動体力回復付与・切れ味強化・状態不変

オートリジエネ

・・・・日本刀の弱点に真っ向から喧嘩売っているわね。折れず・曲がらず・欠けずの状態不変に加えて切れ味強化のフルコンボ。

おまけにこれも杖と同じく魔力を流すと形状が変化したわ。

刀身60cmほどの日本刀タイプと、刀身90cmほどの大太刀タイプに。

・・・大太刀をみて、某片翼の天使を思い出した私は悪くない。

あのキャラクターは好きだもの。左肩からまっすぐ切っ先を向けて構えればいいのかしら？

まあ便利だからいいけど、と切り替え短刀に戻して此方は左腰のベルトに差す。

杖も短刀も色は黒・・・変化が無いとか言わないように。

まあ、黒は好きだし構わない。

最後に寝転んでいた地面の左側に残ったリュックも黒よ。

かなり小さいタイプ、何が入っているのか開けてみる。

・・・うん、だってこの物語チートなもの。

そう思いつつ中を見聞。

入っていたのは松明にランプ、金物の鍋や食器、水筒にタオルや火打石、釣竿など旅の必需品がごろごろ。

水筒は竹製の小さめのモノが六本。あんまり入らないかと思ったら魔法で中身無限になっていた。味は普通の水とレモン風味にオレンジジュース。

何故六本とか思ったけれどこの後の展開を考えてですね、わかります。ご都合主義万歳、グッジョブ神様。

小分けにされたいくつかの袋。一つには今私が来ている服装が三セット入っていた。一応予備？たぶん使う機会無いよと思った私は悪

くない。

もうひとつの袋には下着がたくさん。もう一つは食糧が少々、もう一つは空だった。

最後に手のひらサイズのお財布。中には数枚の金貨。この時代ならかなりの値打ちかな。

とりあえず財布をローブのポケットに入れておく。

リュックに小分けの袋、財布の容量キャパシティは無限になっていた。

もうなんでもありです、はい。

リュックの中身の最後は、一冊の大きな本。

中身を覗くと驚きの内容。

流し読みしただけでも、この世界に存在するあらゆる魔法についての記述がしてある魔導書だった。

これと呼んで学べば魔法関連の技術は問題無さそう。

確かに、エヴァンジェリンと二人で旅することが出来るようになったとしても、独学じゃ難しいところもあるしね。

確か原作だと10年かけて闇の魔法を開発したりしたんだっけ。

ばらばらめくると、神様に頼んでおいた彼女の不老を一時的に解除

する方法も発見。

書かれた術式に従ってチートの膨大な魔力でゴリ押しすれば何とかなるそうナ。

そうしてばらばら眺めていると、気で強化した耳に、少女の悲鳴とそれに続く怒声が聞こえてくる。

ゆっくり見るのは後回しと魔導書をリュックに片付ける。

リュックをマントの倉庫に仕舞うと、そのまま羽織り一気に声のした方へ駆けだす。

さあ・・・この世界の物語の、メインヒロインを救いに行きましようか。

主人公設定

名前

シルヴィア（前世の名前は封印↓消去されたため容姿のキャラクタ
ーからそのまま名乗らせてもらう）

職業

OL↓神（魔王）候補

年齢

22歳（生前・転生後の肉体年齢≡永続）
122歳（精神と○の部屋で修業後の精神年齢。以後加算）

容姿

小説『レイン』シリーズのシルヴィア・ローゼンバークを原作15,
6歳の美少女から22歳の美女に引き上げた容姿。
身長は170cmほど。スリーサイズはボンキュッボンのグラマラ
ス美人さん。Ecupのボイーン級。
サファイアブルーの瞳。彫刻のような造形。高い腰にすらりと伸び
た脚、肌も白くきめ細やかなすべすべシルクの完璧美女仕様。

貫った能力

不老不死…首を落とされても心臓を撃ち抜かれても死なない。

超再生…負傷した次の瞬間には傷が癒える。

ステータスMAX…肉体的には古龍を片手で屠る事が出来る。精神的・頭脳的にはMIT（マサチューセッツ工科大学）の首席の学力が赤ん坊に思えるぐらい。IQに換算すると250ぐらい。

気と魔力の総量増加…総量がエネルギー換算地球五つ分。

あらゆる技術を短期間で効率よく習得する才能…常人の10倍から上の習得効率

前世の世界の一般常識

魔眼…分析・解析特化型。情報の取捨選択、特定情報のロック機能など多機能・汎用性高。魔力を込めると発動。発動中は両目が深紅に染まる。

保有スキル

気…臍の下、集積地である丹田から全身に気を流し、身体強化が行える。単純な筋力強化から反応速度や体感時間の向上など効果は幅広い。手や足に集中させた気弾を放って攻撃することが出来る。『高速移動術・瞬動』が使える（第三話）

貰った服装

ローブ

黒地に赤と金で飾りつけ。袖あり・前開き・フード付き・腰丈の、
パーカーの様なローブ。

オートプロテス オートシエル オートリジエネ オートリフレッシュ オート
自動物理防御・自動魔法防御・自動体力回復・自動魔力回復・自動
リペア オートクリーン オートフライン
修復・自動清潔・自動環境快適適魔法付与。

ブラウス・ホットパンツ

どちらも黒。ホットパンツはぎりぎりお尻が出ない短さ。
オートリペア オートクリーン
自動修復・自動清潔付与。下着類にも同じ魔法を付与。

ロングブーツ

膝下ぐらいの長さの黒ブーツ。ヒールはないぺたんとしたタイプ。
オートリペア オートクリーン オートリジエネ オートヘイスト
自動修復・自動清潔・自動体力回復・自動加速付与。

マント

膝下丈のフード付き袖なし、胸元でボタンで止める完全外套使用。
色は黒。

オートプロテス オートシエル オートリジエネ オートリフレッシュ オート
自動物理防御・自動魔法防御・自動体力回復・自動魔力回復・自動
リペア オートクリーン オートフライン オートホールド
修復・自動清潔・自動環境快適適魔法・自動収納魔法付与

貰った装備

ヘルメスの杖

全長150cm。片手で握る事ができる太さ。先端から20cmほどが太く六角形の台座を形作る。その台座の上に六つの爪で固定された拳サイズの水晶が付いている。台座には二匹の蛇が絡まり螺旋を描いて上り、台座の淵に頭を付ける意匠が施してある。魔力を込めると30cmほどの短杖に変化する。

オートリフレッシュ
自動魔力回復付与・魔力伝達効率強化・魔力集束効率強化・魔力拡散効率強化・状態不変付与

妖刀正宗

刀身30cmほどの短刀。鰐なし。魔力を込めると刀身60cmの日本刀、90cmの大太刀に変化する。

オートリジエネ
自動体力回復付与・切れ味強化・状態不変

貰った持ち物

リュック

片方の肩にかければ済むくらいの小さな黒いリュック。実は神様の力で容量が無限にされている。中の袋類も同じく容量無限。

中身

松明・ランプ・金物の鍋や食器・水筒・タオル・火打石・釣竿など旅の必需品がごろごろ。小分けにした袋。財布

水筒

竹製の小さめのものが六本。味是水・レモン風味・オレンジジュ

ス。これも神様製の中身無限。

小分け袋その一
シルヴィアの着る服装が三セット。予備。

小分け袋その二
色とりどり、可愛いからセクシーまで幅広い多数の下着。

小分け袋その三
食糧袋。食糧が少々入っている。

小分け袋その四
今のところ空。

財布
手のひらサイズの革袋製。中には数枚の金貨。

魔導書
シルヴィアの介入した『魔法先生ネギま』をベースにした世界に存在する全ての魔法を記述した魔導書。

事情

突然変異により魂が神・魔王クラスの格を得た一般人・女性。

増加する人間界に神・魔王Ⅱ管理者の手が回らなくなりつつある状

況を受け、神様より勧誘を受ける。

刺激的な生活を求め、神（魔王）候補として並行世界である人間界へ介入する管理者として歩み始める。

最初の世界は『魔法先生ネギま』ベースの世界。

性格・内面

生前から覚悟を持ち貫く誇り高い人物が好き。自分もそう在りたいと常々考え実行する。

どんな事情であれ、行動と選択には相応の責任が発生する、が信条。もともと一般人だが、今後を考え入った神様の持つ部屋で殺しを含め、これからの自分に対する覚悟を決める。

『私は、私と私の大切な者のために生きる。そのために力を行使する』

自分や自分が気にいった・大切な存在のためには全力を尽くす事を厭わない優しさと、逆に気に入らない・どうでもいい存在に対しては無関心で関与しない、目の前で生きようが死のうが構わないと斬り捨てる冷酷さを併せ持つ。

自分や自分の大切な存在を邪魔する者・仇成す者は全力で叩き潰す

冷徹・苛烈さも持つ。

自分は正義の味方などではなく、無関係な全ての人のために動くな
どないと割り切っている。

究極的に、自分と自分の大切な者が幸せであればよく、その他は端
的に言ってもいいという考え。また、それらを助けなければ
ならない理由は無いと考えている。

ここで言う大切な者とは、広義的に人・物・概念的な存在⇨組織や
社会、国など幅広く指す。

こういった考え・行動が可能なのは、力を持つ者故の権利であり、
同時に傲慢・排他的であるとも理解している。

理解した上で受け入れ、貫く覚悟を決めている。

管理者としての道を選択した責任は、物語を見届けることで果たす。
自分と自分の大切な者のために生き、力を使う。その覚悟を貫く途
上で邪魔する者を排除したり、殺したりしたとしても、躊躇も後悔
もせず、ただその事実・存在を受け入れ、背負い、歩む覚悟を決め
ている。

某皇子の言葉「撃っていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ」が
好き。自分を撃つ側に置き、撃たれる側の事情には頓着しない。撃
たれる側が強かろうと弱かろうと、正しかろうと悪かろうと関係な
く撃つ。全ては自分と自分の大切な者が生きるために。いずれ自分
が撃たれる事態に陥るかもしれないとしても。その覚悟を表す言葉
として、このセリフが好き。

基本的に公私のON／OFFが出来る人。

仕事はクールにスマートに。遊ぶ時・ハメをはずすときは思い切り外す。

またそういう人に好感も抱く。

女だらけの孤児院育ちで、女子高・女子大出身。レズビアン・サディストの性癖持ち。

また、その情報を隠す事もせずオープンにしている。

学生時代、多くの女生徒・女教師を虜にして跪かせ可愛がる様から付いたあだ名は女帝。

中学時代は引きこんだ人間で固め男子を封殺。勢いで学校全体を掌握したこともある。

特に深い関係を結んだのはごく一部。その全員を分け隔てなく愛し、相手に認めさせるだけの愛を持つ。ハーレム主人公補正付き。

男嫌いという訳ではなく、会話も普通にできる。ただしあまり興味がわかず恋愛感情も発生しない。

生前はゲームなどもそれなりにした。プレイスタイルは限界まで育て上げて蹂躪する無双タイプ。性癖…サディストも関与。

圧勝という言葉が好き。合言葉は『粉碎！玉碎！大喝采！』

性癖…レズビアンの影響により可愛いものに目がない。この場合の可愛いは、見た目はもとより内面が重視される。

誇りや信念、確固たる自分というものを持っている人、思慮深い人などが好き。

逆に浅慮な人、勢い任せな人、与えられたもののみで思考しない人などは嫌い。

そんなシルヴィア基準をクリアした存在（人・物）全般を『可愛い』と評価する。合言葉は『可愛いは最強！』

「皆さまごきげんよう。作者のクロです。ご挨拶が遅れたことをお詫びするとともに本作読んでいただきありがとうございます。」

「主人公のシルヴィアよ。私からも感謝するわ」

「今回は第一話・第二話で出てきた主人公・シルヴィアの設定をまとめさせていただきました。今後更新すると思います」

「ねえクロ。太丈夫なの、これ。色々インフレしてない？」

「大丈夫です。この作品の合言葉は『粉碎！玉砕！大喝采！』ですから」

「つまり私が無双すると？」

「そうです。ちなみにもう一つの合言葉は『可愛いは最強！』です」

「そこは正義じゃないの？」

「正義は一義的ではないのです。ちなみに至高も考えましたが、クロのリスククトする某作者様と被ってしまうので最強にしました。」

「どちらにしてもその合言葉だと・・・色々食べちゃいそうね」

「その予定です。どれだけ無理矢理感をなく自然に堕とせるか・・・それが課題です」

「前提からしてハードル高いわよね。というか中学生を堕とすって・・・まあ魅力的な子が多いのは否定しないけど」

「具体的にはメインヒロインとその従者に加え、日本人形系お嬢様・護衛・西洋系お嬢様・和風お嬢様・スナイパー・同人メガネっ子・

ヴァーチャルメガネっ子・養護教諭、以上が現在の目標です」

「隠す意味あるの?というか多いわね」

「一応年のためです。まあしばらくは登場しません」

「しばらくは原作前の話ね」

「プロット確かめるとかなり長くなる予想ですが、気長に楽しんでいただけると嬉しいです」

「天上天下唯我独尊突っ走っているわよね。読み手を選びそうね」

「まあ、それも含めて『私は、私と私の大切な者のために生きる』
です」

「今回はその大切な者、メインヒロインの登場ね」

「いかに颯爽と、カッコよく助けるか。そしてその後口説き墮とす
か。それが問題です」

「せいぜい悩んで私を活躍させなさい。それじゃあ今日はこの辺で
お別れね」

「作者より偉いとはこれいかに」

「なにか?」

「いえいえ」

「それではまた次回お会いしましょう。皆さま、ごきげんよう」

主人公設定（後書き）

よければ感想、お待ちしております。

第三話 遭遇・怒り・首チョンパ（前書き）

前回のあらすじ

覚悟を決めた。

世界に介入開始。管理者人生スタート。

神様から貰った物を点検。

第三話 遭遇・怒り・首チョンパ

羽織ったマントを靡かせながら少女の悲鳴が聞こえた方へ向かって森の中を駆けていく。

元々のチートボディに加えて、全身に気を巡らせ強化した私が走れば、常人では到底到達できないスピードを出す事が出来る。

ほどなく、目的地に到着。

そこに彼女は居た。

原作の登場人物の一人、私の会いたかった相手。

金髪の西洋人形のような美しさを持つ彼女の名は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。

呪いによって吸血鬼の真祖、日の光や流水など一般的な吸血鬼の弱点を克服した上位種、人ならざる存在にされてしまった少女。

私の到着はまだ誰にも気づかれてはいない。

崖を背に震える少女と、それを囲む大人の男達。

数は全部で十人。

私はその大人達の後ろに着いた形だ。

少女は少しずつ下がっていたようだがそれも限界。もう少し踏み出

せば崖下の川に真っ逆さまの状況。

「ようやく追い詰めたぞ、邪悪な吸血鬼め！」

人垣の中心、いかにもなローブを羽織った男が杖を少女に向け叫ぶ。

見るからに聖職者。問題は『どちら側』の人間かという事。

普通の人間たちが暮らす『あちら側』、たしか『旧世界』と言ったかしら。その聖職者でも、この時代なら杖を持っていておかしくない。

魔女狩り・異端狩りも最盛期はもう少し後としても、全くない訳じゃない。

まあ、この場に限って言えば『あちら側』であろうと、『こちら側』つまり魔法が認識されている『魔法世界』の側であろうと関係ない。

しかし今後の事を考えるなら話は少し変わってくる。

追手云々の話しになるからだ。

回りの他の大人は明らかに付近の村人という様子。ローブ男の言葉に乗せられて来たのだろう。

視線や表情、纏う気はまさに“狂気”

予想通りだとしたら・・・恐らくその通りなのだろうが・・・・・・
なんとも虫唾が走る。

「あなた達、いい大人が寄って集って一人の少女に、何をしているのかしら？」

声を掛けながら森から出て近寄る。

その時、私は自分の胸が締め付けられるような痛みを感じた。

こちらに背を向けていた大人達より一足先に彼女は私の存在に気付いた。

新たな声が聞こえたことによって助けを期待したのだろう。

その表情を一瞬、安堵に彩られる。

しかし次の瞬間、出てきたのが私だと、否、“大人”だと気付いた彼女の表情は、落胆・諦観のそれに変わる。

神様の話では、時間軸としては彼女が吸血鬼の真祖になって一週間
ハイ・デライトウオーカー
というところ。

その間、逃げ続け、心をすり減らして来たのだろう。

いつの間にか、私は拳を握りしめていた。

胸に渦巻くのは明確な怒り。

彼女を人ならざる存在に変え、大切なものを奪った元凶に。

教え植えつけられた知識と感情だけで彼女を人ならざる者と罵り、恐れ、害そうとする目の前の男達、否、下衆達に。

そして何より、力を得ながら目の前の彼女すら救えていない私自身に。

不老不死の呪いはもとより、この一週間の苦しみと言う意味で。

私が彼女を救いたいと思っていたのは神様も知っているだろう。

それでなお一週間後という時期だったのは、それが介入の限界だったからだと言想できる。

つまりは、今の時点の私ではどうにもできないことと言える。

そもそも全人類を助けられる訳では無いし、助けようとも思わない。

候補とはいえ神にも出来ることと出来ないことがある。

それでも目の前の少女を一時でも苦しめ、救う事が出来なかったのが腹立たしい。

たとえば原作知識と言う色眼鏡の部分があったとしてもだ。

「なんだ貴様は！我々の邪魔をするのか！」

そんなことを考えていると、目の前のローブを着た下衆が返事を返してきた。

最初はマント、外套を羽織る私を唯の旅人とでも思ったのだろう。

しかし黒と言う色にいぶかしみ、若干の警戒をしながら声をかけてくる。

「言ったでしょ、あなた達が彼女になにをしているかを聞いているの」

「この娘はこう見えて吸血鬼なのだ。それも上位種の真祖だ！故に我々が討伐する！」

「なぜ？」

「吸血鬼は悪だ！悪は滅ぼさなければならぬ！だから正義たる我々が討伐するのだ！」

想像通りの、なんともお粗末な話した。

しかしそのお粗末な話を並べる下衆も、周りの下衆達も、皆正義と言う言葉に酔い、当然とばかりの表情。

・・・まだよ、シルヴィア。まだ抑えなさい。まだ引き出せる情報があるはず。

そう思いつつ、元々嫌いだった正義という言葉がより嫌いになるのを感じながら話を続ける。

「その子が吸血鬼？冗談でしょう？なにかそうだと言う証拠でもあるの？」

「……………」

その私の質問に、饒舌だった下衆の言葉が止まる。

とっさの反論がない、という事は一つの可能性が浮かび上がる。

この男の根拠としている事象が『魔法世界』の理屈によるもの、という可能性だ。

原作の知識と神様の話しが確かなら、彼女が吸血鬼の真祖にされたのは一週間ほど前、十歳の誕生日。

親は地方領主で、城で開かれた盛大な誕生会の中に吸血鬼に襲われ、呪いに掛かり吸血鬼の真祖となったはずだ。ハイ・デイルイトウォーカーしかも親を含め身内や参加者を虐殺されて。

もし下衆が『旧世界』側の人間なら、ただその事実を述べて、唯一不自然に残った娘の仕業、と述べればいい。

しかし結果は沈黙。

なぜなら下衆の根拠は、吸血鬼の真祖としての覚醒による強大な魔力の流れを感じたから……などというのはどうだろうか。ハイ・デイルイトウォーカー

突然の質問に、反射的に『魔法世界』の秘匿を行ってしまったのではないか。

少なくとも、この下衆から何かしら知り得ることができそうだ。

そんなことを瞬間的に考えていると・・・

「根拠ならある！」

別の下衆が突然叫び出した。

「領主様の城に多くの死体があった！こいつだけ生き残ってたんだ！こいつはお嬢様の姿を似せた化け・・・」

ザシュッ！

その先を下衆が話す事は無かった。

特に考えて動いた訳ではない。

ただこれ以上彼女を苦しめたくなかっただけ。

むしろ遅すぎたと後悔するくらいだ。

下衆がわめきだした次の瞬間には、下半身に氣を流し張り巡らせる。

同時に足の裏と地面の間で氣を爆発させて、一気に接近。

『高速移動術・瞬動』

10 mほどの距離を一瞬で肉薄。

同時に右手で左腰から抜いた短刀に魔力を流し、日本刀・正宗に変形。

すれ違いざまにその首を切り落とし、彼女と下衆共の間に立つ。

ドサツ！

ようやく頭が落ち、続いて体が崩れる。

目の前の少女は、目を大きく見開き驚愕している。

いくら吸血鬼の真祖といえども、なりたてのこの子にしてみたら、突然目の前に現れたようなものだ。

それとも、あっさり殺したことに恐怖されているかな？

そんなことを考えつつ、安心させるように、優しく微笑みかける。

より大きな驚愕、そして反射的に疑いの視線。

悲しいが、仕方ないことだとそのまま体を反転、下衆共の方を向く。

「「「うわあああああつあああああ！」「」「「「ば、ばけものだーーーーー！」「」」」

少女に向けた、微笑みとは真逆の怒りの視線を向けると、六人が逃げ去る。

残りは三人。うち二人の農民は、手に持っていたすきや鍬を振り上げようとする。

「遅い！」

再び瞬動を使い、二人の首を飛ばす。

斬り殺しながら、入念に自分の心を探る。

あの神様特製の部屋での訓練が効いたのか、躊躇も後悔も感じていない。

そこには、満足しつつ、最後の下衆と対峙しようと視線を向ける。すると聞こえてきたのは・・・

「『プラクテ・ビギ・ナル！トレース・スピリトゥス・グラキエリウス・サギテント・イニミクム氷の精霊3柱、集い来りて敵を射て！
サギタ・マギカ魔法の射手・連弾・氷の3矢！』」

やはり魔法使いだったようね。

それにしても3柱を撃っていないながら、一番最初の始動キーだったかしら？あれが初心者用のやつなのはどういうことかしら。

単発じゃないってことは一応学んではいるのだろうけど。

原作の基準、どうだったかしらね。三桁行ったらかなりのものだった気がするけど。

並の魔法使いは二桁くらいかしら。

などとのんびり考えていられるのも、気のお蔭。

反応速度や体感時間も向上しているおかげでこんな状況でも冷静に思考できる。

実際、ただ避けるなら寝ていても出来るくらい余裕。

というか装備の自動防御たちで十分。マントの分すら越えることはできないだろう。

でもこの後の色々な説明を考えると、ここで彼女に私の人外っぷりを見せておく方が早いかもしれない。

また傷つけるかな？・・・そんな自分に苦笑と若干の怒りを覚える。

そんな感情を抱えながら、私は魔力を装備に流して、マントとローブの自動防御を切る。

そうして・・・・・・飛来する氷の矢を正面から受けた。

「え？・・・・・・い・・・・・・いやー！！！！！！」

ああ・・・・・・また悲しませてしまったわね・・・・・・つくづく情けない。

「はははははっ！正義の使者たる私の邪魔をするからこうなるのだ！」

見事命中させた下衆が何か騒いでる。

しかし気付かないのだろうか、ある異変に。

「ははははは・・・はは・は・ん？」

ああ、ようやくお気づき？まったく鈍いわね。

私は構わず後ろを振り返る。

「大丈夫よ・・・ごめんね」

そうして、驚愕に固まる彼女に微笑み、驚かせたことを謝る。

それにしても、つくづく度し難いと自分でも思うが、彼女が悲鳴を上げてくれたことに嬉しいと思う自分がいる。

たとえば警戒してしようと、自分を守ってくれた人間が傷付くのに反応して悲鳴を上げる。

そんな彼女の優しさが嬉しい。

そんなことを考えながら、目の前の下衆に意識を向ける。

口をパクパクさせて、言葉も無いようだ。

それもそうだろう。

なぜなら今の私は、胸と腹部、右太ももの三か所を氷の矢が貫通しているのだから。

ぶっちゃけ、痛い。でもまあ、百年の特訓で痛みにも慣れた。

普通なら即死の状況で、さらに見せつける。

あいた左手で氷の矢を掴むと、三本ともぽんぽん抜いてしまう。

開いた穴から血が吹き出るが、それもすぐに止まる。

二人の目の前で傷が瞬く間に塞がる。

後ろの彼女の反応はわからないが、下衆はがくがく震えだした。

「彼女が吸血鬼だから、人ならざる存在だから殺すと言うのなら・・・私も殺さなければならぬわよね？」

あえてクスクス笑いながら話しかける。

ドサツと音を立てて、下衆は尻もちをつく。顔面は蒼白、そのままずりずりと下がり始める。

「まあ、あなたの事情なんか関係ないのだけれどね。彼女の受けた苦痛、私の受けた苦痛、その代価は払ってもらおうわ」

「うわあああああああ！」

ザシュッ！ザシュッ！

私の言葉に、ついに恐怖が決壊した男は、そのまま四つん這いで逃げようとする。

私が瞬動で前に回り込むと、そのまま両手を斬り落とし、蹴り上げ仰向けにする。

「ぎゃあああああああ！腕があああああ！」

「うるさい」

そのまま顔を踏みつけ、無理矢理黙らせる。

「私の質問に正直に答えなけれ殺す。余計な事を話しても殺す。質問を終えたら・・・まあ『助けて』あげる。OK？」

踏みつけ話す私の言葉に、下衆はコクコク必死に頷く。

もう大丈夫かと、足を外して質問を始める。

「最初の質問。あなたは魔法使いね。どうして『旧世界』の、こんな所に？」

「見聞を広めるために旅をしていた。その途中で今回の件に遭遇したんだ」

「どうやって彼女が吸血鬼だと知ったの？」

「一週間前、ちょうど私は問題の起こった城の城下町に泊まっていた。そこで夜に突如強大な魔力が流れ溢れ出すのを感じた。念のため朝まで待って町の人間と共に城に向かうと、そいつ一人を残して全員死んでいた。人間の子供が起すには規模が大きすぎた。魔力の残滓も残っていたから吸血鬼だと思ったんだ！」

「たまたま居合わせ、相手が悪である吸血鬼だから殺そうと？」

「そうだ！・・・吸血鬼は殺す、普通の事だろ？なあ、もう話す事は何もないよ！頼む！助けてくれ！」

「ふーん。まあ、もう聞くことはないわね。いいわよ」

「ほ、本当か！」

「ええ・・・苦しみから『助けて』あげる」

「・・・？」

「彼女が逃げたのは助かりたかったから。その彼女をあなたは助けようとしたかしら？」

「・・・！ま、まっけてくれ！」

「正義だ悪だと言葉を振りかざして、一方的に彼女を殺そうとした人間が命という意味で助けを乞えると思う？」

「お、お願いだ！」

「私の大好きな言葉にこんながあるわ。『殺していいのは、殺される覚悟のある奴だけだ』」

まあ、言葉は少し違うけど意味は同じだからいいでしょう。

彼の物語はかなり好きだったから覚えている。

私みたいなチートバグキャラが行っても説得力は薄いけれど。

それでも私の覚悟から考えると、殺される覚悟くらいは当然持っている。

好きなように生きる、そのための障害を排除する、というのは往々にして反感を生むわね。中には恨まれる事態になるかもしれない。

その結果撃たれるかも、殺されるかもしれない。まあ、ただで殺されるつもりは毛頭ないけれど。

「な、なんでもする！だから・・・」

「私、約束は守る性質なの。だから約束通り、苦しみからは『助けて』あげる・・・もう用済みだしね。さよなら」

「まっ・・・」

ザシュッ・・・ゴロン

寝転んだ下衆の首を斬る。

転がった首の表情は恐怖に彩られていた。

それでも私の心には波風一つ立たない。

正直取るに足らない存在に、いちいち心動かされたりはしない。

それを確認できただけでも有益かしら。

……本格的に魔王化フラグかしらね。

埒もない事を考えながら、正宗の血を払い、短刀に戻して鞘に納める。

くると振り返り、少女を見つめる。

正直、今までの事は前座になりもしない。

彼女とのこれからの会話に比べたら、斬り殺した三人の存在なんて私にとっては路傍の石以下だと思う。

だからこそ頭を切り替えて望まなければならない。

彼女を一人にはしたくないから。

それがたとえ私の勝手だとしても、押しつけたとしても。傲慢だとしても。

これから彼女が歩む長き道。

一人では歩ませたくない、悲しませたくない。

否、それは私も一緒か。

ここでもし一緒に居る事を断られたら、600年ほど私も一人ぼっちか。

むむむ・・・ますます失敗でなくなつた。

さて、まずは何から話そうか。

そう考えながら、ゆっくりと彼女に向かって歩き出した。

第四話 出会い、歩み寄る者達・事情と理由と旅立ち（前書き）

前回のあらすじ

少女に悲鳴に駆けつける

下衆共をお掃除

第四話 出会い、歩み寄る者達・事情と理由と旅立ち

下衆共の掃除が終わった私は、振り返りゆっくり彼女に近づく。

5mほどの間を空け止まると、ゆっくりしやがむ。

焦ってはいけない。

なぜなら彼女は、今も警戒し、こちらの一挙手一投足に目を向けている。

突如人ならざる者に勝手に変えられ、周りの大人達から言われの無い罪で追われ、訳も分からず逃げ出す。

10歳の少女が経験するには酷すぎる状況が、彼女の警戒心を形作る。

焦ってはいけない、急に動いて驚かせてもいけない。

そう心に刻みながら口を開く。

「大丈夫？」

「・・・・・・・・」

「私の名前はシルヴィア。吸血鬼では無いけれど・・・私も人以上の力を持つ、人ならざる者よ」

「・・・・・・・・」

「少し話がしたいの・・・よければ少し移動しない？」

そこまで話すと一旦口を閉じる。

なにもこんな血の匂いが漂う場所で長々と話はしたくない。

かといってそれより重要なのは彼女と一緒に来てくれるかどうか。

だからまずは彼女のアクションを待ってみる。

口を閉ざしたままの彼女。その表情は少なくとも思案はしていると思う。

まずは第一歩と言ったところか。考えもせず断られる可能性も無かった訳じゃない。

あくまで想像しかできないのが歯がゆいが、それだけ彼女の受けた心の傷は深いだろうと思う。

ふと思案する彼女の瞳が、私の左腰に差した短刀に向く。

「これが怖い？」

「・・・(コクッ)」

初めての目に見えるアクション。また一歩前進。

まあ当然と言えば当然かしらね。あれだけの殺戮を見せつけたのだから。

そう思った私は、ゆっくりマントの裏地からリュックを取り出す。

何も無いところから取り出した私に驚く彼女。

私は「後で教えてあげる」と微笑むと、マントを脱ぎ、短剣と短杖を外し、マントと一緒に二人の中間くらいにゆっくり放る。

私の行動に困惑する彼女。

「私は貴女を決して傷つけない。その証として武器も預けるわ。」

視線を合わせ見つめながら、はっきりと告げる。

驚愕・困惑・歓喜・疑惑、と言ったところだろうか。

さまざまな感情がうずまく表情で、私と地面に放られた荷物を交互に見る。

やがてゆっくりと、一歩ずつ踏みしめるように歩き出す。

そうして私と彼女の中間辺りに放られた荷物を拾い抱きしめる。

その瞬間、彼女に聞こえないように抑えつつも、安堵の吐息を洩らす事は止められなかった。

まだ先は長いが、これで切っ掛けを作る事は成功したようだ。

「それじゃあ、移動するけど、いいかしら？」

「・・・(コクッ)」

そうして私達は歩き始めた。

しばらく歩くと、最初に目にした小川の脇に降りる事が出来た。

都合の良い事に、その近くで座るのに適した岩が転がっている場所も見つけた

他の旅人も利用したのだろう。岩の並ぶ中心には焚き火の跡がある。それ自体は、だいぶ時間が経ったもののようで、気を使って周囲を探っても人の気配は無い。

「ここでもいい？」

「・・・うん」

後ろから付いて来ていた彼女に尋ねると、小さいながらも答えてくれた。

たったこれだけの事が嬉しいと思う私は少々危ない人に思えてくる。同時に、原作の知識、そういった色眼鏡で彼女を見ることは危険だとも思う。

私が今ここに居るのは、原作の知識があり、原作の彼女が好きで、彼女を助けたい、共に生きたいと思ったから。

それが押しつけであれ、我儘であれ、私の本心。

でも、原作のエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと、目の前の彼女は違う。

そう再認識し、自分を戒めながら岩に腰掛ける。

リュックをあけ、竹の水筒を三本取り出すと、反対側におずおずと座った彼女にそっと差し出す。

「・・・?」

「それでも飲んで、少し待っていてくれる? 私、薪になりそうなもの探してくるから」

「・・・あり・・・がとう」

おずおずと受け取りながら答える彼女に微笑みかけ、私はゆっくり立ちあがる。

それでもびくりと震え、こちらを見てくる彼女。

驚かせたかな？とも思ったが、どうやら少し違うようで。すぐに思いつく。

「大丈夫、すぐその、見える範囲で集めてくるから・・・いい？」

「・・・（コクツ）」

私の言葉にほっとしたのか、頷き緊張をほぐす。

それなりに心は開いて来てくれているかな、と思いつつ、話を続ける。

「そうそう、少し寒くなってきたから、そのマント羽織って待っていてね」

すでに日は傾き時刻は夕方ぐらい。周りの木々の紅葉具合から季節としては秋ぐらいだと予想。

場所は日本より北に位置するイギリス、まして元いた世界から見て600年前なら、気候的に気温が低いかもしれない。

そう思い声をかけてから、森の脇に向かい枯葉や枝を集め始める。

薪を集めながらそつと様子を伺うと、おずおずマントを羽織って環境快適の効果に驚いたり、勝手に自分サイズに修復されて驚いたり、水筒の中身がそれぞれ味が違うのに驚いたり、オレンジジュースが気にいったのかごくごく飲んだり、中身が尽きないことにまた驚いたり、先ほどとは打って変わって年相応の反応を示してくれた。

はっきり言えば・・・何この可愛い生き物、である。

原作エヴァを誇り高き大人ロリッ子とするなら、目の前の彼女は年相応ピュアロリッ子だろうか。

そんなおバカな事を考えつつ、彼女の反応を堪能しつつ、集めた薪を持って戻る。

「あの・・・これ・・・中身が。それに・・・このマントも」

水筒を掲げ、訪ねてくる彼女。

「ええ、それも魔法の効果なの。中身は無くならないから好きなだけ飲んでいいのよ。魔法の事も気になるだろうけど、後でちゃんと説明するわ」

安心させるように微笑みかけると、薪の準備を始める。

既に前の旅人が残したおかげで石の竈が作られていたので、そこに必要なだけの薪を並べ、リュックから火打石を取り出して着火する。

数回打つだけであっさり火種が着く。・・・確実に魔法の効果と思いさつと確認すると、ある意味予想通りで魔力付与がされていた。

明確な魔法ではなく、魔力付与。ようはとてつもなく火が付きやすいが分類上ただの火打石、と言うことだ。

まあいいやとリュックに仕舞うと、今度は食糧が入った小分け袋を取り出す。

中には乾物と果物がごろごろ。あとは塩と・・・紅茶の壺。とりあ

えず、ステーキ見たいな大きさのビーフジャーキーと、魚の干物、リンゴを取り出すと袋をそのまま彼女に渡す。

「あんまり種類ないけど、好きなの食べていいから」

座っていた岩に干物とリンゴを置くと、リュックから鍋を取り出し川に水を汲みに行く。

別に水筒から入れてもいいのだけれど、汲んだ方が早いから行く。

そういえば、乾物と干物って別物だったかしら？スルメはどっちだろ。

どっちにしても、手軽な乾物系はこれから自作しなければならないわね。

あの小分け袋、生モノでも腐る事はないよう魔力が籠っているけど、片手で食べられるのは捨てがたいしね。

肉は血抜き・解体・塩漬けた後燻製、魚は開いて内臓取り除いて塩漬けの後、天日干しで半日・・・だったかしら。

はぁ・・・元々、余程のものでない限り美味しいと思えちゃう味音痴のお蔭で、料理に興味無かったのがここで響くとはね。

神様に貰った一般常識も、全く知らないと思いだしにくいみたいだし。これは盲点だったわ。

そんな事を考えながら、ジャーキーを齧りつつ川で水を汲み戻る。

戻ってみるとそこには・・・小動物がいた。

頬いっぱい乾物や果物を詰め込む様は、リスやハムスターを想像させる。

この一週間、ほとんど飲まず食わずで、逃げていたのだろう。

少しは警戒を緩めてくれたのか、その分忘れていた空腹にさらされた、というところかしら。

私が戻ったのに気付くと、頬を染め、申し訳なさそうにおろおろする。

「いいのよ、おなか減っていたのでしょ？好きなだけ食べていいの。でも焦って食べると喉詰まらせちゃうわよ？」

安心させるように微笑みながら、水の入った鍋を火にかける。

そうして視線を戻すと、口の中のものを飲み込んだ彼女は、何かを堪えるように唇を結んでいた。

人間の三大欲求の一つ、食欲が満たされて、さらに安心できたのかな？

私はそっと立ちあがり、頬に手を伸ばす。

最初はびくりと震えた彼女も、その手から逃れはしない。

だから私は、ゆっくりと、慈しむように彼女の頬を撫でる。

その瞬間、彼女は焚き火を回り込み、私に抱きついてきた。

腰にまわされた腕はきつく締められ、腹部に顔が押し付けらる。

小さな体から震えが伝わる。

だから私は、彼女を優しく抱きしめ、一緒に岩に腰掛ける。

「ふっ・・・ぐすっ・・・うう」

「もう・・・いいのよ。よくがんばったわね・・・もう大丈夫。私はここにいます。あなたとずっと、一緒に居るわ」

「うあああああああああ！！！！！！！！！！」

私が小さく囁くと、少女の悲しみと喜び、その他様々な感情を取り込んだ泣き声が、夕闇に染まる森に響き渡った。

翌朝。

あのまま彼女は泣き疲れ、そのまま眠った。

私は彼女の頭を膝に乗せながら、万一に備え岩に座りながら眠った。そして目覚めると、目の前には彼女の可愛い寝顔。

豊かな金の髪は朝の光に輝く。

完成された西洋人形のような容姿は、今の私の姿とはまた違った美しさ。

着ていた黒のワンピースドレスは、逃亡中に所々裂けたのかボロボロだ。

それでもその美しさを損なう事はない。

そんな可愛らしい妖精は、穏やかな寝息と共に、未だ夢の中。

つい悪戯心が起きて、その頬をぷにぷにと突く。

そんな風に穏やかな時を過ごしていると、そのうち彼女も起きる。

「・・・・・・・・あつ」

「おはよう、良く眠れた？」

「・・・・はい、ありがとう・・・・ございます」

挨拶を交わし問いかければ、体を起こし、頬を染めながら頭を下げる。

そんな彼女に微笑みかけながら、手を取り立ちあがる。

「どういたしまして。まずは顔洗って、ご飯食べて、話はそれからにしましょう」

そういうとりユックからタオルを取り出し、二人で川に向かう。

手を握れば、きゅっと握り返される。そんな感触を噛みしめながら。

「昨日は危ないところをありがとうございました。名乗りもせずすみません。エヴァンジェリン・マクダウェルです」

食事を終え、さあ何から話そうかと考え出したところで、彼女は姿勢を正し、深々と頭を下げながら名乗り上げた。

親の躰の賜物か、10歳とは思えない堂々とした謝意と謝罪。

「いいのよ、あなたも大変だったのだから。それじゃあ改めて、私はシルヴィア。後で話すけどファミリーネームはないの。好きに呼んでね。私は・・・エヴァちゃんて呼んでもいいかしら？」

「はい・・・えと、シルヴィアさん」

はにかみながら答えるエヴァちゃん。

でも、この後その笑顔を歪めてしまうかとも思うと心苦しい。

それでも事態の把握が出来た方が良いのも事実だ。

「エヴァちゃん、さっそくだけど・・・何があったか、話せる？」

「!・・・・・・」

「無理に、とは言わないわ。ただ・・・」

「いえ、大丈夫です」

そう答え、まっすぐ見つめてくる瞳の何と力強いことか。

この子は本当に10歳の少女なのかと思えてしまう。

わずかに震える肩を見なければ、本気で疑ってしまっただろう。

「ただ・・・あの・・・」

そうして、私の隣に視線を向ける。それだけで何を願っているのか分かった私は手招きする。

ほっとして、隣に座ろうとしたエヴァちゃんを、私は抱き寄せ膝の上に座らせる。そうして腕の中に抱きしめる。

「ひゃっ！」

「無理はしない事。いい？」

「・・・はい」

そうして語り出したところによれば。

彼女はやはり、とあるイギリスの地方領主の娘。ただし、血の繋がりはなく、預けられた身だそうだ。

実の両親は病ですでに他界。知人であった領主夫妻に預けられ、実の娘のように可愛がられていた。

血の繋がりが無い事は周囲にも公表されており、それでもなお、子供のいない領主夫婦に変わりいずれは婿を・・・などと話が出るくらい、認められていたらしい。

彼女も義理の両親に懐き、幸せに暮らしていたそうだ。

その幸せが崩れ、事が起こったのは彼女の十歳の誕生日。

途中、具合が悪くなり一旦部屋に引き揚げた後眠ってしまったそう
だ。

目が覚め広間に戻ると、そこは既に血の海。

中央に立っていた男の足元には、両親の亡骸。

そこから先は断片的な記憶しかないらしい。

覚えているのは、男の話し、男が自分に呪いをかけたという事、吸血鬼と言う単語、成功に酔った男が両親を足蹴にしたこと、そして・
・右手に残る血肉を断つ感触。

気付いた時、男の身体はばらばらになり、床に散らばっていた。

自分の力に、行った所業に恐れ慄く彼女。

しかし次の瞬間、窓からさす日の光が、いつのまにか朝になっていた事を知らせる。

このままではいずれ異変に気付かれる。

その時自分はどうなる？ これだけの惨劇、一人生き残った自分の強大な力・・・

その時全てを理解していた訳でも、想像していた訳でもない。

ただ本能が、ハイ・デライトウォーカー吸血鬼の真祖として覚醒した生存本能・危機察知能力が、このままここに居ることの危険性に警鐘を鳴らした。

とっさに両親の手から指輪をはずすと握りしめ、すぐさま自分の部屋に向かい着替える。

逃げることは頭にあっても、それに適したような服装はなく、結局いつも着ているようなワンピースドレスを着こむ。

二つの指輪に紐を通し、首にかける。

その時、城の入り口で人の声がする。

もう気付かれた！

次の瞬間、彼女は駆け出し、正面とは別の入り口から城を脱出した。

その時、見られていないと思ったが、中を検分していたあのロープを着た下衆に姿を見られ、その後一週間追われ続け、昨日に繋がる
と言うわけだ。

……話し終え、震える彼女を抱きしめる。

「ありがとう……よく話してくれたわ」

聞いた限り、ほぼ原作と同じ流れだった。と言う事は彼女の復讐すべき相手はまだ生きている。

そいつの名は『造物主』
ライフメイカー

後の戦争の黒幕にして、『魔法世界』を作った存在。

その辺を含めて、今度は私が話し始めた。

この世には、神と天使が治める『天界』、魔王と悪魔が治める『魔界』が一つずつ存在する。

そして、神や魔王が管理する『人間界』が無数に存在する。

私は元々別の人間界に存在していたただの人間。

それが神（魔王）候補として力をもらい、この人間界の管理にやってきた。

「それじゃあ・・・シルヴィアさんは、神様なんですか？」

「まあ・・・見習いみたいなものだけどね。急にこんな話して、すぐには信じられないわよね」

「いえ・・・シルヴィアさんが嘘をつく必要はないですし」

そうして笑いかけてくれるエヴァちゃんを抱きしめながら話を続ける。

今回私が介入した人間界は、そんな多数の中の一つで、ここは二つの世界によって成り立っている。

すなわち、普通の人が暮らす『旧世界』と、魔法が認知されている『魔法世界』だ。

『旧世界』の人間は『魔法世界』に存在せず、魔法の存在も知らない。

逆に『魔法世界』関係者のいくらかは、『旧世界』にも存在している。

昨日の、ローブの下衆がそれに当たる。

そして、エヴァンジェリンが掛けられ、その存在ごと作りかえられた呪い。覚醒したそれは吸血鬼の真祖と呼ばれる種。ハイ・デイルイトウォーカー

一般的な吸血鬼の弱点とされる日光や流水を克服した上位種。不老不死と圧倒的再生能力、闇の眷属故の膨大な魔力から、『旧世界』『魔法世界』問わず最強種の一つとされている。

不老不死故に老いることも、死ぬこともない種。孤独を抱き続ける存在。その呪いを解く手段がない事も話す。

またその呪いに掛けた存在、すなわち造物主ライフメイカーはまだ生きている可能性も話す。

「・・・そっか、私、本当に化け物になっちゃったんだ」

そう寂しそうに話す彼女を抱きしめずにはいらなかった。

「・・・そんな言い方しない方がいいわ。・・・私は、『人ならざる者』って言う事になっている」

「『人ならざる者』？」

「ええ、人以上の力を持つ、人以外の存在。その方が、化け物よりは響きがいいでしょ？」

「くすくす、シルヴィアさんは神様ですけどね」

「あら？魔王になる可能性もあるわよ？」

気分を変えるためにおどけた会話を続けながら、神と魔王の違いを話す。

もちろん、色欲に溺れれば魔王に・・・などと話せないので、出世欲や金銭欲に置き換え、本能や欲望に忠実だと魔王や悪魔よりの存在になる事、そこでの正義と悪が一義的ではないことも説明した。

そうして話を聞いていたエヴァちゃんがおもむろに、そして意を決したように問いかける。

「それで・・・シルヴィアさんはなぜ私を助けてくれたんですか？」

「私は、エヴァちゃんが良ければ一緒に旅をしたいと思っている」

その私の言葉に目を見開き驚く彼女。その瞳が揺れる。

そんな彼女に話を続ける。

『人間界』には、目的や理由となる『物語』が存在する。その『物語』が他の『人間界』に、娯楽と言う意味での『物語』として存在する場合がある。

これを原作と言い、この『人間界』の原作が、かつて私が居た『人間界』に存在した。

「!それじゃあ・・・」

「ええ、その中にエヴァンジェリン・マクダウェルという人物も登場していた」

その事実により更に驚くエヴァちゃん。

ここで誤解を与えないように一気に続ける。

「私は原作の中のエヴァンジェリンが好きだった。そして、その原作を基にしたこの『人間界』に来ると分かった時、彼女を救いたいと思った。彼女も、不老不死として、孤独に苦しんでいたから。そして私は貴女の前に現れた・・・だけど気付いたの」

そこで私は彼女を抱き寄せ、その瞳を真正面から見つめる。

昨日、決して傷つけないと誓った時のように。心が伝わるように。

「今日の前に居るエヴァちゃんと、原作のエヴァンジェリン・マクダウェルは違う。私はこの人間界に来る前に決めた事があるの。それは『私は、私と私の大切な者のために生きる』と言うもの。その私が、今、守り一緒に旅をしたいと思っているのは原作の彼女ではなく、目の前のエヴァちゃんだから」

そこまで話した私は、一旦口を紡ぐ。私も彼女も、視線をそらさず見つめ続ける。

「もし・・・嫌だったり、時間が必要なら・・・」

「行きます」

すこし間を置こうか・・・そう続けようとした私に、エヴァちゃん
ははっきりと続けた。

その時になってようやく、私は緊張していたことに気付く。

震える手をそのままに、彼女の頬に当てる。

「いいの?」

「はい・・・さっきも言ったけど、シルヴィアさんは嘘をついてな
いと思う。その必要もないし、真っ直ぐに私を見て話してくれたか
ら・・・それに」

そこで私の手に自分の手を重ね、今までで一番の笑顔を浮かべる。

「もう一人は嫌だから・・・シルヴィアさんと一緒なら、私、笑え
ると思う。きっと楽しい。だから・・・私も、一緒に連れて行って
下さい」

その言葉の後に、瞳から涙を流したのはどちらが先か。

「ええ、一緒に行きましょう。二人で、ずっと一緒に」

「はいっ」

わからぬまま、二人は微笑み、涙を流し、抱きしめあう。

二人の心を包むのは安堵と歓喜。

暖かな日差しの中、二人は共にある幸せと温もりを噛みしめながら抱きしめあった。

その後、随分話し込んだことと、抱きしめあったまま落ち着くまで待った事で、太陽の位置はすっかり真上、正午になっていた。

昨日の今日で、この辺までなら追手が来るかもしれないと、とりあえず南へ向けて、二人は旅立つことにする。

理由は特になく、暖かい方へ向かうという意味で。

それとなくエヴァの住んでいた城まで、思い出の品などを取りに戻る事も示したが、本人があっさり却下。

胸元の二つの指を握りしめ「私には両親のこれと、シルヴィアさんがいるから、大丈夫」と笑顔で言われて抱きしめたのは少し前の事。なんとなく、自分のキャラが壊れていると思わないでもない。

さっきも、まさか自分が泣くとは思っていなかったわけで・・・感情移入はしていたけども。

まあ、それでもいいかと切り替えた私は、隣でオレンジジュースをちびちび飲みながら歩くエヴァちゃんに爆弾を投下する。

「エヴァちゃん、今日から私達、義理の姉妹って事にしようと思うんだけど、どうかしら？」

「!!!! ケホッ ケホッ！」

うゝむ、予想通りの反応。そして咳き込む姿も可愛らしい。

・・・シスコンフラグ？ ナニソレオイシイノ？

そんなおバカ会話を脳内で交わしていると、エヴァちゃんが再起動。

「いきなりどうしたんですか？」

若干恨めしげに、しかし頬を染めつつ上目遣いのエヴァちゃん。

・・・うむ、これは強力です。

「女の二人旅はそれなりに目立つし、せめて関係ぐらいはあり得るものにしようかなと思って。」

実際問題、あまり注目を浴びるのは得策じゃない。どうせ目立つにしても理由と関係の二つの好奇で目立つより、理由だけで目立った方がまだまし、という程度だけだね。

服装、というかマントとかのほうが目立つかな〜とか思うけど気にしない。

「・・・そう言う事なら是非。よろしくお願いしますね、シルヴィア姉様♪」

「!!!! ケホッ ケホッ!」

水を飲もうと口を付けていたら、なにやらかなり上機嫌な声で聞こえてきたエヴァの口撃。

効果? もちろんクリティカルですがなにか?

「エヴァちゃん、いえエヴァ、あなたね」

「ふふっ、さっきの仕返しです♪」

じゅっと見つめ合う二人はやがて同時に笑いだす。

そうして、ちらちら見ていた手を差し出して、二人で手を繋ぎ歩き始める。

これからの長い、とても長い旅を、二人で一緒に。ずっと一緒に歩んでいく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1012y/>

吸血鬼の真祖と神（魔王）候補の転生者

2011年11月4日04時31分発行